

5. 学生からの地域貢献活動実施報告

(1) ささやまファン倶楽部

代表 神戸大学経済学部3回生 菅原 将太

おはようございます。神戸大学ささやまファン倶楽部の代表をしております経済学部3回の菅原と申します。よろしくお願いいたします。今日は2つ話題をお話させていただきます。1つ目は、私たちささやまファン倶楽部の活動報告、2つ目は本日のフォーラムに関連したことを少しお話できればと思っています。

まずは、ささやまファン倶楽部についてです。先程、布施さんから説明がありましたように、神戸大学では篠山の農家さんのところへ弟子入りするという実習があり、私たちの活動しているこの西紀南地区で、2009年に農業農村フィールド演習という授業が行われました。それがきっかけでその翌年2010年9月に、ささやまファン倶楽部が結成されました。

活動地域は篠山市真南条上集落というところです。だいたいここから車で20分くらいのところで、人口が56世帯152人、高齢化率が36.3%と典型的な農村集落となっています。この集落に入って、地元の営農組合の方々や自治会の方々、あるいは女性団の方々と一緒に活動しています。

活動は3つに分かれており、1つ目が“里山整備の活動”です。集落の「由利山」という里山に入って、だいたい月に1回整備活動をしています。

2つ目が“援農”です。地域の営農組合の方々と農業のボランティアやお手伝いをしています。

3つ目は“イベントへの参加”です。集落の里山まつりというイベントに参加したり、集落の敬老会で人形劇をしました。人形劇は地域の民話を元にしたもので、地域のことを知る良い機会になったと思います。

次に、今回のフォーラムの1つのテーマである“継続”についてです。神戸大学のサークルが篠山市内でどんどん増えていく中で、ささやまファン倶楽部は2009年にできたので、その当時に実習に出ていた学生はもう卒業しています。どんどん人数が先細りしていく中で、継続できるのかな、と心配もありますが、継続といってもいろいろあるよな、と思いました。サークルとして続くというもひとつの形ですし、サークルやプロジェクトを3年あるいは4年と区切りをつけて活動し、卒業後は個人的な付き合い、というもひとつの形だと思っています。

ささやまファン倶楽部に関しては里山整備をしています。基本的に里山整備は何年、となかなか区切れない活動だと思っています。山の整備というものは、継続的に一生終わらないようなものなので、マップづくりをしている地域や、何か新しくイベントを起こした地域、学生団体とは内容や質的に“継続”というものを考える上で異なってくるのかなと考えます。“どういう形で続けていくのが良いのか”と考えたときに、究極的には、“学生や地域がどんなものに興味があるのか”“地域がどんなものに興味があるのか”で違ってくると思います。学生が継続するのもそうですし、地域



ささやまファン倶楽部



里山整備



農作業の手伝い

のほうも継続する必要があるのではないかなと考えています。

ささやまファン倶楽部の受け入れの中心になってくださっている方も70歳を超えていらっしゃるの、その方がもしおられなくなったときに、学生が続けて地域に入ることができるのか、僕たち学生が心配してもどうしようもありませんが、考えたりもします。

ささやまファン倶楽部だけでなく、神戸大学のサークル全体的にそうですが、実習を受けた世代が卒業していった後にどう継続していくのか、というのはみなさん非常に興味があることですので、このあとのディスカッションでそういったことについてみなさんとお話できればなと思っています。以上です。ありがとうございました。

(2) にしき恋

副代表 神戸大学農学部2回生 関 亜喜奈

おはようございます。今日は寒い中来ていただきありがとうございます。

私たちは“にしき恋”という団体で、ここ篠山市西紀南地区で活動しています。現在メンバーは48人で、1名だけ兵庫県立大学の学生ですが、あとは全員神戸大学の学生で、農学部がほとんどですが、理学部、経済学部、文学部、発達科学部などさまざまな学部の学生が所属してくれています。設立は今年ですが、昨年、この地域で授業が行われたので、その学生が中心となって7人で設立しました。その授業が他の学生から見たらすごく面白そうだったということで声をかけたら、その授業を履修していなかった学生からもたくさん希望があり、今では大所帯となっています。活動日は、毎週末の土日祝です。毎週末全員が参加するわけではなく、その中で予定の合うメンバーが参加していて、土曜日は少なめで5~6人、日曜日は参加できる人が多くて10人を超えるときもあります。ここへはみんな電車で来ますが、ここから歩いて20分くらいのところに丹波大山駅という無人の駅があり、1時間に1本の電車で大阪や神戸から毎週末通っています。

主な活動としては、“農業ボランティア”が中心です。さまざまな農家さんのところへ行行って農作業のお手伝いをさせていただいています。また、“にし恋 farm”というものが、地域の方に田んぼをお借りして、お米や黒大豆を自分たちで栽培してそれを販売したりしています。

それ以外に、地域で行われるさまざまな行事に参加しています。また、“里山整備をやって欲しい”という地元からの要望があり、県の事業で現在裾野の整備が行われているところを、それに伴い里山全体の整備計画を作成して、来週、地域の方に向けて発表させていただくことになっています。

他にも全国には食や農業に関わる団体がたくさんあるので、そういったいろんな団体との交流をさせていただいています。

活動を詳しくお話していきます。まず、“農業ボランティア”です。学生と農家の方々が、金銭のやりとりなしに、お互いに利益を得られる関係を維持していくことを目指しています。今現在受け入れ農家さんが14軒ほどあり、まちづくり協議会へ要請を出していただき、学生とまちづくり協議会で何人参加できますという連絡を取り合い、まちづくり協議会から農家さんに何名行きますという連絡をしていただく形になっています。

この活動を4月からスタートして、農家さんとの関係も変化してきました。最初の頃は、農家さんは、「女の子に汚れる仕事や力仕事をさせるのは申し訳ないな」「1日ずっと同じ仕事をさせるのは申し訳ないな」と遠慮していたり、学生も「これ聞いてみたいけど今忙しいかな」「あれやってみたいけど邪魔になるかな」とお互いに遠慮していました。しかし活動していくうちに、どろんこになって活動したり、女の子でも30キロの重いお米を運ぶ学生がいたり、そういった姿を見て、農家さんも「なんでも頼んでいいんだな」というのを感じていただいたようで、最近では、延々と続く土を寄せるという黒豆づくりで一番大変な作業を1日中したり、真夏の暑いときに田んぼの草を80歳のおじいちゃんと延々と抜き続けるという作業を一緒にしたりだとか、トラクターも運転をさせていただいたり、農学部の学生が多いので、すごく貴重な経験をさせていただいています。授業の内容と実体験が繋がってより理解が深まりますし、農学部以外の学生は、



にし恋 farm



農作業の手伝い（トラクターの運転）

このようなことができる機会はほとんどないので、みんな喜んで帰っていきます。

次に“にし恋 farm”についてです。このあと行っていただきますが、20畝という広さの田んぼになります。コシヒカリを10畝、あと半分の10畝を黒大豆と夏野菜を植えていました。植える野菜の種類や配置、栽培の方法も自分たちで調べて学びながら育てました。丹波の黒大豆は、10畝の8割を植えていたのですが、お手伝いに行った農家さんのところで教えてもらったことを実践して作りました。今は冬野菜が植わっています。

にし恋 farm は、生産から販売までを学ぶ場所でもあって、そこで活動していると、地域の方が頻繁に寄ってくださいます。「またやってるなあ」と声をかけていただいたり、「そんなことしたらあかんで」と怒られたり、「こうしたらいいよ」とアドバイスをもらったり、「これ使い」といろんなものを貸してくれたりします。

篠山市というのは大学がないので、大学生が、こういうところをうろちょろしているというのは滅多にないことで、畑で大学生がこんなことをやっているというだけで、地域に元気を与えられているのかなという実感はあります。

販売についてですが、コシヒカリと黒大豆を枝豆として販売しました。また、兵庫県庁の方の授業を受けているのですが、「県庁でも注文取ってあげると」と言ってくださり兵庫県庁でも販売させていただきました。また、徳島でのインターンシップの関係で個人的に繋がりがあり、徳島の飲食店に卸させていただいたり、販売させていただいたりしました。

また、東京の丸の内“ジャパンフードフェスタ”というものがあり、出店させていただき枝豆を販売してきました。実感としては、東京では黒枝豆の認知度がまだまだ低く、こうして私たちが積極的にいくことで広がっていったらと思います。そこでは、農林水産大臣がいらっしゃり、お話もしました。

また、神戸大学の六甲祭と厳夜祭へも出店しました。厳夜祭では、他の4団体と一緒にやって出店しました。

次に他団体との交流についてです。全国から学生が集まる合宿に参加したり、そこで繋がった学生がにしき恋の活動に参加してくれたりしています。先週もちょうど京都大学の学生が来てくれました。夏には、鳥取大学の学生がにしき恋の活動に参加してくれてワークショップをしました。

次に地域活性化についてです。5月、6月の最初の頃は、都市部から学生を呼ぼうと、自分たちでイベントを企画して、タケノコ掘りや蛍の鑑賞会、流しそうめんをしました。50名くらいの学生が集まりました。しかし、地域の方と一緒にするというよりは、学生たちが勝手にしているというような感じがして、まだこういうことをする段階ではないのかな、と感じました。

そのあとは、地域行事への参加に力を入れました。神輿の担ぎ手や夏祭りでの司会、一緒に焼きそばを売ったりと、地域の方との交流を大切に今は活動しています。朝の清掃活動と一緒に参加したりしているうちに、さまざまな方とお知り合いになれて繋がりも増えました。来週も小学校であるグラウンドゴルフ大会と餅つきにも参加することになっていて、地域の方とすごく仲良くさせていただいています。

夏に一度、中間報告会として地域のみなさんに向けて活動報告させていただきました。そのときは、学生が普段どんなことを考えているのかを地域の人たちに向けてお話させていただきました。というのも、活動していると、「こんなところに毎週きて遊ばんでいいの?」「楽しい?」と聞かれるので、それに答えるために、「私たちはこんなことが楽しくて来てるんですよ」としゃべったところ、地域の方はすごく喜んでくださり、その後の懇親会では話も盛り上がりました。今まで関わりのなかった地域の方同士の新たな交流の場



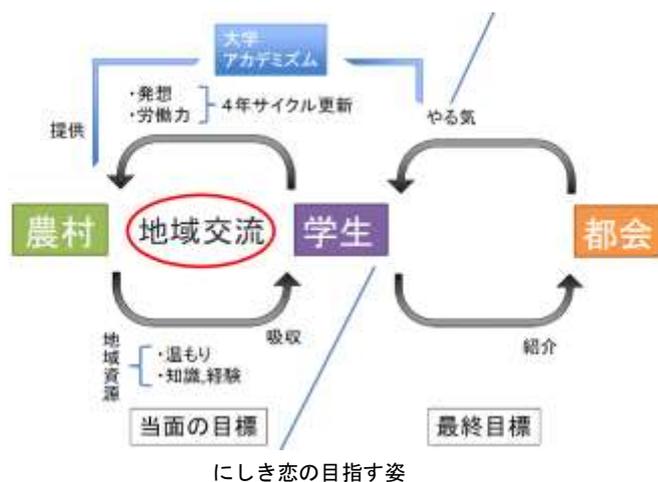
ジャパンフードフェスタでの黒枝豆の販売



中間報告会後の懇親会の様子

が生まれたということで、最初は報告会という形ではありましたが、すごく良い場所になったので、こういった機会をたくさん持てればいいなと思いました。

最後に“継続”ということについて、にしき恋の目指す姿です。当面は、地域の方との交流を大事にして、私たちからは発想や労働力を提供し、地域の方からは人の温もりや知識、経験を与えていただくという関係でやっていきたいと考えています。この発想や労働力は、私たちは大学生なので4年サイクルで更新されていくため、地域の方々はいろんな新しいものをもらえるのではないかなと思います。将来的には、繋がりが強くなっていき、都市部の学生を地域に連れて来ることに



よって、私たちも外部の人が入ってくることでやる気も出ますし、都市部の方は新たな機会を得ることができるといった形を目指していきたいと思っています。以上です。ありがとうございました。

学生を受け入れている地域団体からの報告

西紀南まちづくり協議会 事務局長 北山 透

みなさん、おはようございます。先程紹介していただきました、西紀南まちづくり協議会の事務局長をさせていただいております北山透と申します。よろしく申し上げます。

私たちの西紀南まちづくり協議会というのは、どんな形で立ち上げたら良いだろうという思いを持って発足しました。いろいろと模索しながら活動をしていたところ、神戸大学の方から、学生たちがこの地区で“交流したい”“勉強したい”と言ってくださりこの西紀南地区に来られました。そして、徐々にこの地でさまざまな経験をしていただき、私たちまちづくり協議会も活力が出てきました。彼らの“波及効果”と言いますか、私たちが彼らと色々なことで接することによって、地域の人たちもまちづくり協議会も非常に活性化してきました。これは非常に大きなことだと感じています。



西紀南まちづくり協議会（みなみほっとサロン）

学生がこの地域に入って、地域の方とお話し、作業し、そしてその中から学ぶものというのは、学生の思いは先程お話にもありましたが、地域の方同士の交流しかなかった地域のみなさんにとっても、「学生と接したら、なんか元気になった」という声を聞いています。そういった“不思議な現象”と言うと少し違いますが、“若い方の活力”“生き活きた表情やお喋り”、それが地域の方の活性化に繋がっていると感じています。実際に私も実感していますし、地域の方も顔を会わせたら「おはよう」と自然に出るようになりました。“地域活性化”というのはこういったやり方もあるのだな、と感じています。学生さんが地域に入ってさまざまな交流活動をされて、高齢化で人口も減少している地域が、まさにみなさんの力で活力がでてきていると感じています。そういった意味で、西紀南というこの地で、神戸大学の学生さんがいろいろな活動をしていただいています、これからもできたら継続していただく、ということが地域の活性化に繋がると感じています。

学生が来て行動するというのは、地域の方にとっても活力が出てきているし、学生のみなさんも、地域との交流というのは、やっていけば地域の方が感じとっていただけるので、“交流”はどんどん広げていただきたいし、続けていただきたいと感じています。普段、私の感じている気持ちをお話させていただきました。私の方からは以上です。ありがとうございました。

(3) 関西学院大学法学部 4 回

関西学院大学法学部 4 回生 青木 耕平

関西学院大学法学部 4 回の青木耕平と申します。今から山下ゼミ 4 回の活動を簡単にご紹介させていただきます。

先程みなさん通って来られたと思いますが、木の根橋のあるこの柏原町に対して、3 回生のときにまずどうアプローチしたらいいのだろうかということを考えました。外から見たり調べたりしたらどうかという話が出ましたが、活性化するときには基本的なことですが、外から調べるだけではダメだろうということで、かといって、いきなり中に入ってまちを活性化するというのはできないだろうということで路頭に迷ってしまいました。

その中で、一学生として何をすべきか考えたときに、“地域のことをよく知らなければいけない”、“地域の人と仲良くなれないといけない”、というごくごく自然な流れになりました。

2012 年度はどういう活動をしようかということで、仲良くなるといっても地域には小学生から高齢者の方まで世代がたくさん居る中で、僕たちは小学生と仲良くなるということになりました。小学生と仲良くなるにはどうしたらいいか、安直ですが、キャンプをしようということになりました。キャンプによって小学生と仲良くなって、小学生を繋がりとして、柏原に対していろいろな活動をやっ
ていこうじゃないかとなりました。



小学生対象キャンプの実施

その中で一番大事にしたのが自由研究で、小学生の宿題をやっ
てあげるのが僕らのできることではないかな、と一緒にいろんな実験などの自由研究をしました。キャンプがお終わった後、小学生と仲良くなって、それだけで終わってはいけないということで、たまたま別の団体がもちかけてくれた「若者意見交換会」というのを実施しました。内容は、KJ 法を用いて、“柏原あるいは丹波にあるものないものは何だろう”という話をして、みんなでブレインストーミングしました。以上が 2012 年の活動です。



若者意見交換会の様子

次に 2013 年度、ここからが僕たちの活動の本番で、丹波市の中心市街地活性化基本計画の点検を今現在おこなっているところです。その基本計画は今年で一旦終了するのですが、それに対してどの程度事業が実施できているのかをリサーチ中です。4 回生は今それを頑張っているところです。以上です。ありがとうございました。

(4) 関西学院大学法学部 3 回

関西学院大学法学部 3 回生 藤田 杏里沙・富田 峻・隅田 彩子

関西学院大学法学部 3 回山下ゼミの藤田杏里沙です。私たち山下ゼミ生 3 回生は 8 名で活動をしています。

まず、柏原で活動するにあたり、今年度のゼミの目標や目的を立てました。柏原を知らなかったのので、“柏原というまちを知る”“まちの人がどう思っているのかを知る”ということで、地域の人にとってまちがどう発展するのが一番良いのかを考えることになりました。

活動としては、柏原町でフィールドワークをして店舗の方や道を歩く人へのヒアリングを主にやってきました。春は木の根橋などの名所名跡に行き、後半はいろんな方にヒアリングをしました。それに加えて、関学スタジオにさまざまな方に来ていただき、柏原や中心市街地活性化基本計画についての勉強をさせていただきました。

次に、柏原の夏祭りに 8 月 13 日に参加しました。内容としては、近くの公民館で活動の報告、休憩所の開設をして、たくさんの方に来ていただき、交流を深めたりお話を聞かせていただいたりしました。また、夜に行われたビンゴ大会の司会や仮装盆踊り大会にも参加させていただきました。公民館では、飲み物とクッキーの提供と小さい子ども向けにパルーンアート、それに合わせて来訪者に「柏原はどんなまちですか?」「どういうところが気に入っていますか?」などについてヒアリングを行いました。

引き続き、10 月 13 日、14 日に織田まつり、うまいんフェスタに参加しました。関学スタジオを開放し、写真のようにお話を伺ったり、夏祭りと同様に休憩所として開放して活動内容を展示しました。織田まつりでは、実際に行列にも参加させていただき、すごく良い思い出を作らせていただきました。

広報の面では、チラシを作成してヒアリングのときなどに配布しました。また、より多くの方に活動を知っていただくということで Facebook ページを作成し、イベントごとにゼミ生が順番で活動内容や思ったこと感じたことを書き込んで更新しています。

次に、今期は、2 つの懇談会をしました。1 つ目が、たんばハピネスマーケットの方々、2 つ目が丹波市商工会青年部の方々にお話を伺いました。たんばハピネスマーケットは、毎月第 2 土曜日に行われており、オーガニックの食べ物や手作りのアクセサリなどを販売しているものです。“丹波の地元のもので、手作りで、個性のあるもの”に限定したマーケットになっています。こちらは、柏原の方々で立ち上げられたそうです。実行委員会の方 3 名に来ていただき、マーケットのコンセプトや立ち上げから今に至るマーケットの歴史などをお話いただきました。

次に、丹波市商工会青年部の方々は 8 名の方に来ていただきました。柏原での個人商売の仕方や、実際に商売をされていて良いところややりにくいところなどの本音を聞かせていただきました。青年部の方がおっしゃるには、「柏原は元々商売と行政のまちで、それだけで栄えていたので、何をしなくても良かったまちだった」ということです。今後のまちづくりについて私たちの考えや意見をお伝えしたところ、もっと学生の意見を聞きたくなったとおっしゃってくださいました。

次に、柏原地域以外での活動として、尼崎市商工会にお邪魔し商店街を見学、伊丹では、商工会議所を訪問し伊丹市内を見学、また、兵庫県庁も訪問しました。尼崎では、空き店舗の活用事業や駅前ビルの開発について詳しく教えていただきました。伊丹では、有名な伊丹バルやまち中の建物の景観事業について教えていただきました。兵庫県庁では、



柏原スタジオでのヒアリング



山下ゼミ Facebook ページ

“地域再生大作戦”として、大学と連携して地域向上をはかろうというものや、週末マルシェ、関学のサークル“ブレインヒューマニティ”と一緒に活動を行っているということでした。また、“地域の空洞化問題”についても詳しくお話していただきました。個人的には、伊丹の商店街を見て回ったときに、行政の方もすごくフラットな形でみんなの意見をみんなが共有するという体制をとっていて、すごく新しいな、と感じました。

今後の活動については、今までの活動に加えて、“柏原ブック”を作成しようということで、今までのフィールドワークやヒアリングの内容を踏まえて、柏原の中の人たちに向けて“魅力再発見”していただくための柏原の本を作ろうとしています。他には、今年度の活動を報告書にまとめる作業をしています。以上です。ご静聴ありがとうございました。



伊丹商工会議所を訪問

(5) 柏原まちづくりプロジェクト

代表 関西学院大学総合政策学部 3 回生 大森 正江

関西学院大学総合政策学部 3 回の大森が説明させていただきます。活動内容を説明した上で、活動を通して感じた課題と、今後の展望を述べさせていただきます。

先程報告があったように、柏原では法学部と総合政策学部が活動しています。総合政策学部の中でも、2013 年度は、2 回生が「都市政策演習」という授業で活動していて、毎年メンバーを更新しながらも、今年で 5 年目の活動になります。それとは別に、“柏原まちづくりプロジェクト”として、昨年度の都市政策演習メンバーがもう少し具体的にまちづくりに関わりたいということで、有志が残って活動をしています。今回は、この柏原まちづくりプロジェクトの活動を報告させていただきます。

テーマは“つなぐ”です。具体的には、“地域と私たちをつなぐ”。これは、柏原で関学生が活動を始めて 5 年になりますが、“実際柏原スタジオで何をしているのか分からない”“関学生は一体何をしているの？”という声があったので、私たちの活動を知っていただくために始めました。

右の写真は、たんばハピネスマーケットに出店したときのものです。先程法学部から発表があったように、柏原の若手商業者の方々が始めた定期市です。これに、“交流ブース”として出店し、ポストカードを自作したり、昭和 30 年代マップを展示したりして、“少しお話しませんか”という交流ブースを開きました。



たんばハピネスマーケットへ出店

次に、“中心市街地と中心市街地外を繋ごう”ということで、“アートクラフトフェスティバル”というイベントに参加しました。これは、全国からものづくりの作家さんたちが集まるイベントで、自分たちの作品を売ったり、または交流したりするイベントです。2 日間で約 1 万人もの人が集まるイベントですが、1 つ課題があります。柏原で開催されるイベントですが、中心市街地から車で 5 分くらいのところにある少し離れた会場で開催されており、1 万人もの人がやって来るのに中心市街地には全く人がやって来ないという状況がありました。私たちは、それは柏原を知っていただいていないから中心市街地の方に人が流れて来ないと考え、柏原の宣伝をここですることになりました。先程のハピネスマーケットでは、私たちの活動を見て見てと前面に押し出しすぎて、観光客や地域の方から少し引かれてしまうという状況であまり上手くいかなかったので、最初に入りやすいイベントを企画することで、それに参加してくださった方に柏原を広報しようと、2 つのイベントを企画しました。

1 つ目が“丹波でアート”です。“丹波”という文字を 850 マスに区切り、訪れたお客さんに“今日の気分は何色ですか”と問いかけし、色紙を 1 枚選んでもらって、文字や絵を描いて好きなところに貼ってもらいました。会場全体で 1 つのアートを作ろう、また、みなさんの気分で選ばれた色紙で彩っているのでも、“丹波”という文字は会場の気分の色になるのではないか、と思い打ち出しましたが、結局はカラフルになってしまいました。当日は、825 枚くらい集まりました。



丹波でアート

また、“巨大すごろく in 丹波”というものを企画しました。2012 年度、2013 年度で得た丹波や柏原の知識を子どもたちに知ってもらおう、丹波について知ってもらったら愛着を持ってまた帰ってきてもらえるのではないかと考えました。これは結構成功しまして、みなさん積極的に気軽に参加してくださいました。例えば、「丹波竜」のマスにとまると、丹波竜について私たちが説明します。こういった風に遊びな

がら簡単にお勉強できたのかなと思います。ゲームでは、“丹波マネー”というものを作り、「1枚 1000 丹波」で、集めたら優勝グループにはお菓子をプレゼントするという事でみんな結構本気で楽しんでくれていました。くじすごろくとして、手元サイズの大きさも作成しました。もちろん、もともとの目的は“柏原を PR しよう”ということだったので、見学してくださっていた保護者の方ともお話することができ、し、“関学生は何をしているの？”という方にこのチラシを配って宣伝することができたと思います。



巨大すごろく in 丹波

次に、“今と昔を繋げよう”ということで、“まちなかミュージアム提案フィールドワーク”というものをを行っています。これは、昭和 30 年代頃が柏原にすごく活力があった時代で、まち歩きをしていただいていた感じだと思いますが、今の柏原はシャッターが降りている店も少しあり、元気があまりありません。昭和 30 年代と今は何が違うのか、ということ、都市政策の観点から地図上で比較しました。

完成品は会場にも展示しています。ヒアリングによって完成したものなので必ずしも正確ではありませんが、私たちはこれを“昭和 30 年代マップ”と呼んでいます。その地図と今の地図を比較して私たちが思ったことは、コミュニティスペースが少なくなっているのではないかとことです。コミュニティスペースとは、「人々が一定時間その場所に集まり、複数人でコミュニケーションをとる場所」で、これが減少しているのではないかとことです。ヒアリングをしていると、そのスペースはほとんどが飲食店だったのではないかと考えました。テレビや音楽を聞く機械が一家に一台の時代ではなく、みんな飲食店に行ってテレビで相撲やプロレスを見てワイワイして、自然発生の会話を楽しむ場所が飲食店だったのではないかと考えています。



昭和 30 年代柏原再現マップ

コミュニティスペースだと推定される場所を着色していますが、これは主に飲食店です。これを今の飲食店マップと比較してみますと、だいぶ数が減っていることが分かりました。昭和 30 年代から残っている飲食店、観光客をターゲットとしている飲食店（たとえばオルモや無鹿）、新規参入の飲食店をそれぞれマッピングしました。ヒアリングが取れたのが 15 店舗で、その中で新規参入店舗は 5 店舗でした。直近 5 年以内に新規参入した飲食店が 5 店舗もあったことに驚きました。そこで、飲食店にアンケートを取りました。結果については割愛させていただきますが、これらのアンケートより、コミュニケーションの場が減少したのではないかと考えています。

そこでなぜ“まちなかミュージアム提案フィールドワーク”を行っているのかと言うと、昔は交流の場として使われていた飲食店が、今では 2、3 名での利用となっています。また、世代間の交流が少なくなっているという現地の声を聞き、飲食店ではないもっと他の形式で、住民自体が自主性をもって主体的にコミュニケーションを取れる場所が必要でないかと考えています。“まちなかミュージアム”



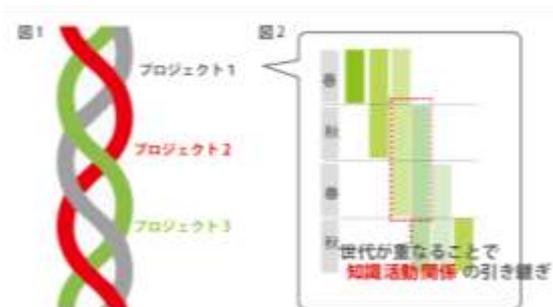
まちなかミュージアム提案フィールドワークの様子

は、各家庭にある古いものを持ち出し、博物館のように展示しようというものです。これには3つ利点があります。1つ目、古いものを持ち出すということは、思い出が詰まっており、地域の方たちはその昔の思い出話をします。また、若い人にとって古いものは珍しく、使い方など教えを請うことが自然に生まれることもいい点だと思っています。また、捨ててしまう資源の保護、ということで、古いものは本人にとってはいらぬものなので、掃除をするたびに捨ててしまいますが、それは地域の文化を物語る大切な資源であると私たちは考えていますので、その保護にも繋がるということで“まちなかミュージアム提案フィールドワーク”をしています。

次に、これらの活動を通して分かった課題について説明します。1つ目は“不十分な連携”、2つ目は“継続年数”です。不十分な連携というのは、先程も言いましたように、柏原では法学部と総合政策学部の都市政策演習、柏原まちづくりプロジェクトの3つが活動していますが、実は全く連携が取れていませんでした。まち歩きの中で、同じ人に何度も似たようなアンケートをしてしまうことがありました。しかし、地域の方からすると、“あなたたちは同じ関学生なのに、なぜ何度も同じようなことを聞かれないとかないのか”、ということで不信感が生まれてしまったのではないかと考えています。また、不十分な連携のせいで、備品の重複購入や同じような政策提案がなされていたと思います。不十分な連携はまちづくり活動に支障を来すと考えます。また、継続年数も大きな課題と考えています。他大学さんはサークル活動のように活動されているので問題ないのかもしれませんが、特に総合政策学部は1年きりの活動でした。どうしてもまちづくりに関わると、まち歩きなどをして地域を知る導入期間が必要になります。これに半年くらいを費やしてしまい、具体的にまちづくりに関わる時間が少ないという現状にありました。成果物を作ったり知識を得てもそれっきりで、次の世代に受け継がれていませんでしたしかし、授業を受けたメンバーが翌年、柏原まちづくりプロジェクトとして参加することによって、地域を知る導入期間が必要ありません。また、前年度の知識や成果を利用してまちづくり活動ができると考えています。具体的には、先程の30年代マップを使って政策を今は勉強しているところです。

結論としては、プロジェクトが何個もあるときに、プロジェクト間のもの・アイデア・情報の共有が必要ではないかということです。これによって一体感が生まれうまれ、お互い刺激になるのではないかと考えています。学生にとっては、もの・アイデア・情報の更新とステップアップになりますし、支え合い、刺激を与える関係、また、同地域で活動するプロジェクトとしてのまとまりが出て、似たような政策提案がなくなり、最終的

には総合的な視野が手に入るのではないかと思います。また、これは地域にとってもいい波及効果を及ぼすのではないかと思います。地域との円滑なコミュニケーションに繋がり、2度情報提供することもなくなります。それによってこのプロジェクトは一連性のある性格をしているということで安心感や信頼感のアップにつながり、ステップアップしたまちづくりというのは結果的に地域に良い効果をもたらすのではないかと考えています。具体的にどう連携すべきかと言いますと、このような螺旋構造を作るべきだと思います。これは、学内プロジェクトだけにとどまらず、他大学との連携や他地域との連携も必要と考えます。ひとつのプロジェクトにひとりの人間が関わる時間が長くなると、他世代とかぶる時間が長くなります。この世代を重ねることで、知識活動関係の引き継ぎができ、ひとつのプロジェクトとしても強いものになっていくのではないかと考えています。以上です。ご静聴ありがとうございました。



連携のイメージ

6. 丹波地域で活動する他大学からの活動報告

神戸親和女子大学文学部 3 回生 岡崎 敦子

神戸親和女子大学文学部総合文化学科の岡崎と申します。フィールドスタディ支援室の活動報告をさせていただきます。よろしくお願いします。

まず、“フィールドスタディ”についてお話しします。取り組みの背景は、若い女性の感性で“情道マーケティング”の提案としており、スタートとして、なんば高島屋の売り場改善に取り組みました。内容としては、高島屋の 5 階を実際に買い物し、そのときにそれぞれ課題を見つけ出し、通路の幅やブランドの種類について提案しました。その後は事情により 5 階がメンズフロアになってしまったので、私たちの提案が 100%活かされることはありませんでしたが、指摘させていただいた通路の幅が改善されていました。

その他にも、淡路の生田村というところで、地域系のプロジェクトも行いました。何度もフィールドワークで現地に足を運び、現地の方と議論を重ねるうちに、最終的にはカフェをすることになりました。今現在はそのカフェをすることにあたり、具体策を進めています。このように私たちは事業系と地域系の 2 つのプロジェクトを行っています。他にも現在進行中のプロジェクトをたくさん行っています。

私たちフィールドスタディの教育目標は、コミュニケーション教育と専門的教育、フィールドスタディ教育として授業で基本的なことを学び、次にデザイン思考、イノベーション思考、システム思考の 3 つの視点を学び身につけます。そして実践力を持って、“主体的に学び考え、どんな状況にも対応できる多様なイノベーション人材になる”という世界が求める人材像を目標としています。

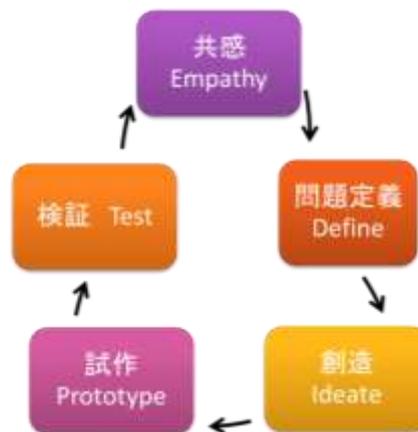
私たちがプロジェクトを進める上で意識しているサイクルが、“デザイン思考のステップ”というものです。共感、問題提起、創造、試作、検証の 5 つのサイクルを回るように意識しています。その中でも“共感”を大切にしており、フィールドワークで現地調査に行ったときにも、現地の方から真相や本音を聞き出すといった雰囲気づくりを心がけています。また、学生同士の本音を聞き出すことも大切だということで、週に 1 回ミーティングの時間を設けてコミュニケーションをはかっています。問題提起の段階では、1 つの課題に対して 1 つの結論ではなく、1 つの課題に対していろんな切り口から課題を解決するように考えています。例えば、経済的な切り口、人やものの切り口など、多様なアイデアを生み出すことを常に考えています。

実際の丹波地域での活動について発表します。私の住む丹波市久下地域は、全国的に言えることですが、少子高齢化に伴って生産人口が減り、空き家空き地が増え、コミュニティが希薄化している状況です。それを解決するために、活動を始めました。

「ゲストハウス×地域の魅力、人の力＝カントリーハウス」として、空き家や空き地を再利用し、人と人、都市と地域が繋がる空間の形成を目指しています。このカントリーハウスの仕組みを説明します。まず、丹波の人が丹波の魅力やカントリーハウスについて情報発信します。そして丹波に来たいと思った都市住民が、目的を持って実際丹波に来て



生田村（淡路）での活動の様子



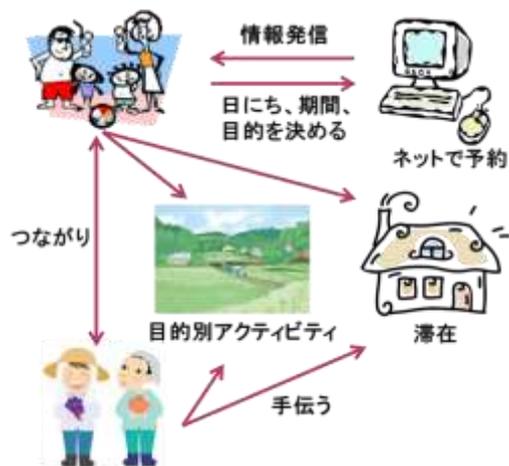
デザイン思考のステップ

活動してもらいます。日帰りではなくどうせ来るなら丹波の魅力をもう少し知ってもらいたいということで、1泊してもらうためにカントリーハウスを造ります。丹波の人は、目的別アクティビティやカントリーハウスのお手伝いをします。ここで生まれるのが繋がります。

目的別アクティビティとは、ターゲット別アイデアとして、さまざまな視点から目的を考えました。子どもや家族、マスター世代、女性や学生などです。マスター世代とは、一般的に言われるベテラン世代のことで、60歳以上の方を指します。丹波の人は何かを極めて来られた方、何かにこだわって生きてこられた方が多いと感じるので、何かを伝える、教える側として“マスター世代”と呼んでいます。学生は、経済的には余裕がないかもしれませんが、時間的には余裕があると思うので、サークルの合宿やプロジェクトの拠点など、自分の学びの拠点としてほしいと思います。

右の写真は、11月16日に行ったフィールドワークの様子です。ポストイットでビジョンや悩み、夢や希望など、何でもいいのであげてもらい、共感の部分と本音の部分を聞き出しました。現在はこれを持ち帰って整理しています。このようにして、デザイン思考のサイクルがしっかりまわるように意識しながらプロジェクトを進めています。現在は問題提起の部分で課題などを設定しています。

最後に、丹波には地域資源がたくさんあるので、これらを大切に守りながら後世に伝えていきたいなと思います。ご静聴ありがとうございました。



カントリーハウスの仕組み



フィールドワークの様子

7. フリーディスカッション・ワークショップ

コーディネーター 神戸大学大学院農学研究科 特命助教 布施 未恵子
 関西大学 TAFS 佐治スタジオ 室長 出町 慎

参加学生が 5 つのグループに分かれ、各班をプロジェクトチームと仮定し、卒業後も「地域とかかわり続けるための仕組み」について提案した。その後、会場参加者全員により投票及び審査を行い、ゲストや大学関係者から講評をいただいた。

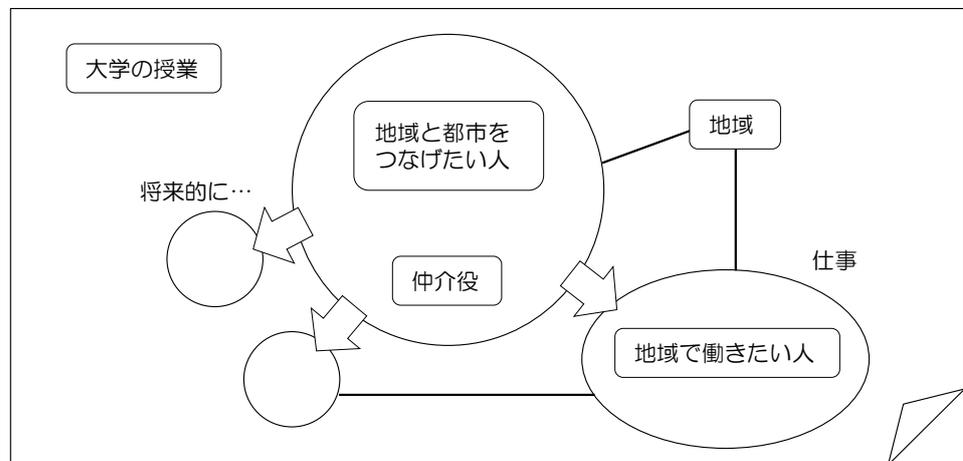
①チーム仕事人（①～⑤は各班のグループ名）

タイトルは、“授業をつくる”です。今日フォーラムでいろんな地域をまわり、地域と都市や、地域とどこかを繋げる仲介役のようなものが必要なのではないかと感じました。その仲介となるものが、地域と関わるきっかけになるのではないかと思います。そこでこの班が提案することは、地域と都会を繋げるためのシステムなどを、“大学の授業化”してしまう、ということです。たとえば、仲介業者やコネクトする人を育成するための授業を、実践的に大学などで勉強しながらやってしまう。学生は、大学組織の中で授業の一環として動くことができます。そして



地域で授業をしているうちに、これを仕事にしたいという人がきっと出てくると思います。仕事にしてしまえば、地域と関わり続けることができる。そうしていくうちに、ひとつの地域だけでなく、いろんなところを繋いでいく、そして地域も引っ張っていく、

といったことができるような“大学の授業をつくる”ということを提案します。

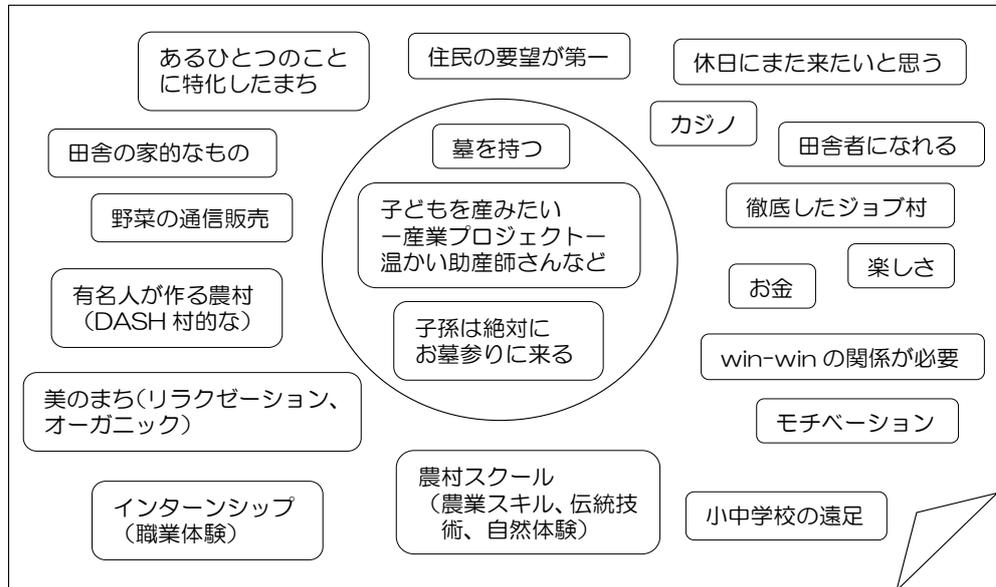


②ゆりかごから墓場まで（得票数最多）

私たちの班では、“関わる”といってもいろんな関わり方があるのではないか、という話になりました。そこで、お墓を作ればその地にお墓参りに行きます。お墓だけでなく、子どもを産んでもらえるような土地を作ります。それを“産む”の“産”から“産業プロジェクト”と名付けます。これは田舎を想定していて、温かみのある助産師さんなど、この地で子どもを産みたいと思う仕組みを作ります。妊婦さんが来られて、子どもを産んでもらいます。そして、ここでお墓を作りたいと思ってもらえるようなきっかけを作ります。お墓のコンセプトは、“この墓に骨

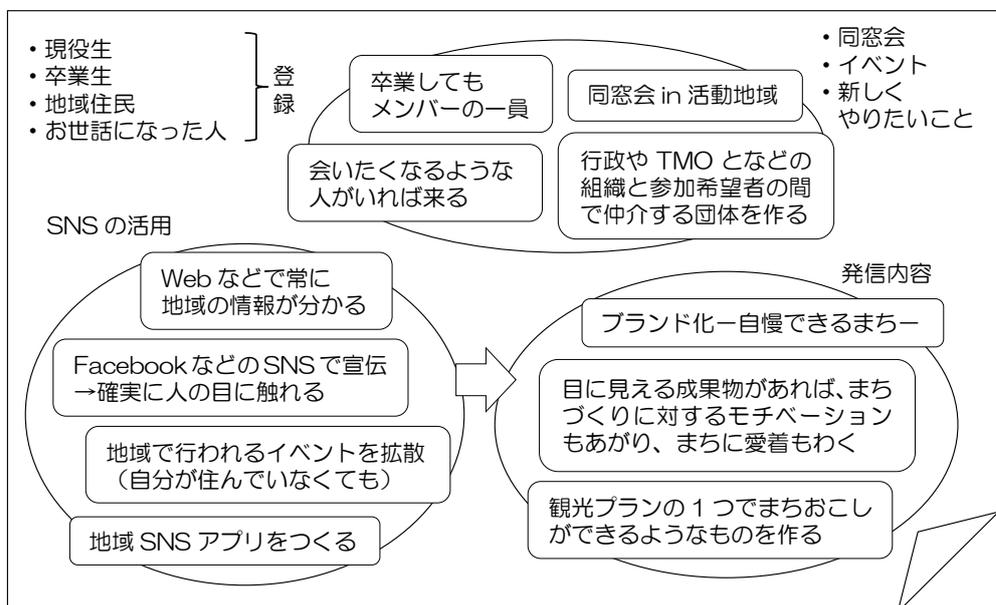


を埋めると、子孫は絶対に喜んで墓参りにくる”ということです。最近、核家庭が増えてきて、“親と子どもの関わりが減ってきているのではないか”“もし自分が死んでもだれもお墓参りに来てくれなかったら寂しいな”と思う人が増えてきているのではないかと考えました。普通お墓参りに行くと、沈んだ雰囲気になりますが、そうではなく、テーマパークのような楽しく温かみを持ってお墓参りに行けるような、プラスアルファの施設や仕組みを作ると、子孫たちは喜んでお墓参りに来てくれると思います。お墓参りに行く交流人口として、その土地を訪れるようになるのではないかと思います。途中は抜けるかもしれませんが、ゆりかごから墓場までその土地に関わり続けていけるのではないかと考えました。



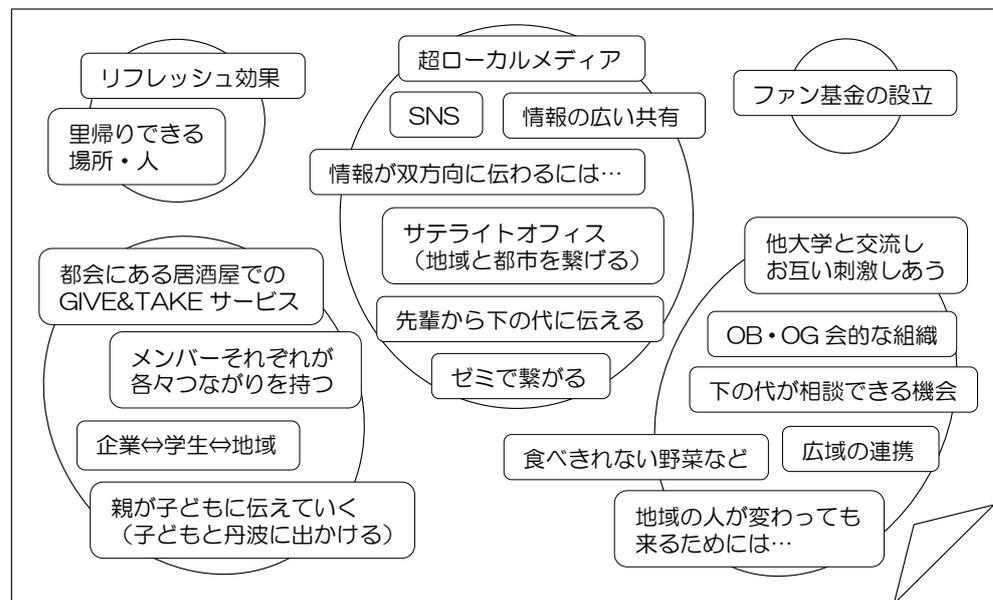
③丹波篠山つながり隊

“SNS”を立ち上げようという話になりました。現役で活動している人、卒業生や地域の住民やお世話になった人に登録していただきます。そこでは、同窓会などのイベントの宣伝、あるいは新しく丹波地域でやりたいことを書き込み、メンバーを募っていただきたいと思います。地域限定の SNS を作れば、たとえば、ひとり農家さんが登録したとします。地域の人の近況を身近に聞くことで、人とのつながりが濃くなるかなと思います。また、卒業してあわなくなっても頭の片隅に丹波が残っているかなと思います。地域に行くというのは、建物や観光施設だけでなく、ここで活動した私たちならではの会いたくなるような人がいれば、丹波にくるのではないかと思います。



④グリーンメン

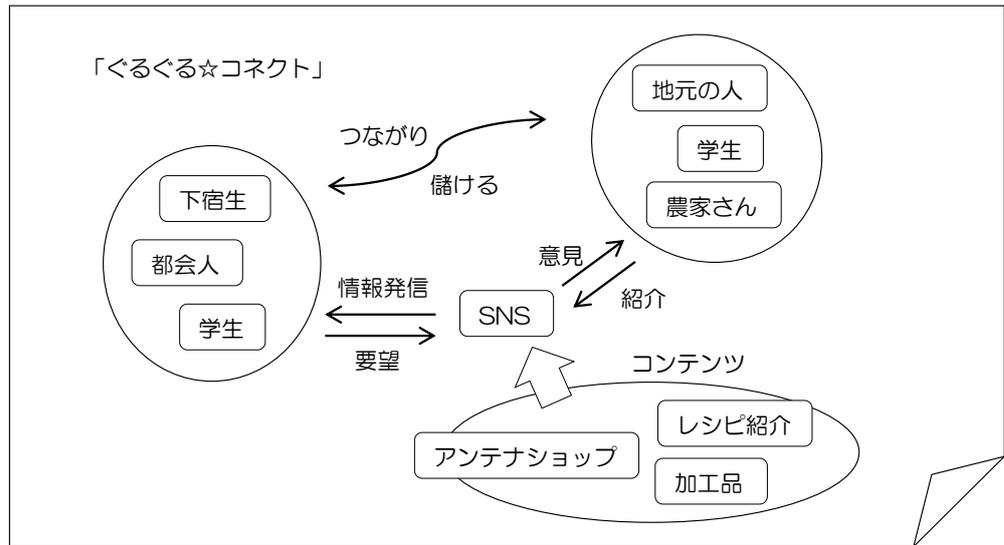
学生団体が卒業した後、どのように地域に関われるのか、ということについて話し合いました。卒業してから何が欲しいか、を考えたときに“情報がほしい”“SNS などを使って学生活動の情報や地域の情報が欲しい”という話になりました。しかし SNS だと使う人が限られているので、ラジオ放送などのローカルメディアのような、何か情報発信するための媒体が必要だと思いました。もうひとつは、情報を知るだけでなく、何か自分たちからアクションを起こしたい、ということで“ファン基金”や、社会人になってからも何かアイデアを意見できるような“意見箱”のような仕組みが欲しいという話になりました。ファン基金は、特典として何があるかと考えたときに、たとえば、地元の方が作って売れ残ってしまった野菜をもらうなど、売れ残りがなくなるような仕組みにも使えるのではないかという話になりました。



⑤others

最初は、地域と関わり続けるというのは、地域に来ることだろうか、ということについて議論しました。その中で、来るのも大変だし、そうではなくて、来なくてもどこかで繋がっておける立場というのはどんな立場かということ考えたところ、僕たちの班でも“SNS”という話になりました。しかし、僕たちの考えた内容は少し違います。まず、農家さんも田舎に住む学生も地元の人、さらに都会に住む学生や下宿生などすべての人がそれぞれ発信できる形で SNS を使います。アンテナショップなどから情報を発信して、都会の人たちはイベント情報などを手に入れます。そして、こういうことをしたいという要望があれば SNS に出してもらいます。その要望を、意見として農家さんなど地域の方たちに発信します。最終的には、都会の人たち、たとえばひとつの家族が、農家さんや地域のひとつの家族と仲良くなって、田舎で自分たちの顔が見ることができるようになります。野菜ひとつが届くにしても安心感があるし、どこかに丹波地域というものが残っていき、“繋がり”というものを意識して、それがいつかは繋がっていったらいいなと思いました。コンテンツをぐるぐるとまわしていくということで、“ぐるぐるコネクト”という題をつけました。





<講評>

小野 敦史 氏 (ゲスト)

長時間お疲れさまでした。少しだけコメントさせていただきます。“ゆりかごから墓場まで”というのは、すごく今の子らしい新しい発想で、“そこまで考えるのか”といった驚きがありました。実際に実現可能かどうかは、これからしっかり提案していただければと思います。当然みなさんは、この地域にこれからお墓を持つと思いますので…(笑)、手続き関係は非常に難しいと思いますが、頑張っていただければそれが定着し、新しいものが生まれていく可能性が十分にあると思います。

また、“ぐるぐるコネクト”の提案は、今からでもすぐに始められるものだと思います。それぞれ専門的な知識を持っている人たち、農業に限らず木材を使える人、都会に住んでいる人たちのファッションなどの新しいものの提供など、それぞれ何かに特化して、それらをつなぎ合わせることでできるシステムというのは、今からでもすぐに作ることができるのではないかと思います。僕たちがこうして、今でも丹波に戻って来るときも、ある人間から伝えられた情報を手に入れて、7年目の今でもこうして関わることができています。そのような事実も含めると、それをシステム化していくというのは非常に素晴らしいと思います。農家さんと都会の方が、それぞれの場所で野外活動などができるなど、見えないツールを通してシンクロしていくのかなと思いました。SNSを使うという意見が今回非常に多く出たのは、今の若い子たちの考えが象徴されていたと思います。是非各大学に SNS を立ち上げていただき、どんどん発信が広がる中で、大学同士や各地域が自然と繋がり、丹波地域全体が盛り上がっていくのではないのでしょうか。そして他の団体がやっているようなことも、実現可能になっていくのではないかと思います。本日はどうもありがとうございました。



田宮 由梨 氏 (ゲスト)

改めまして、みなさまお疲れさまでした。短い時間でしたが、すごくたくさん意見が出てきていて、面白いなと思いながら拝見しておりました。私は JTB 西日本で働いており、“地域とかかわり続ける”が今回のテーマですが、当社でも“地域交流ビジネス”というものを、全社的に取り組んでおります。今後のきっかけに少しでもなればと思い、この場をお借りして簡単にご紹介させていただきます。JTB と言えば、み



なさん旅行のイメージを持たれていると思いますが、“地域交流ビジネス”とは、“地域で消費してもらう”ことを目的にした、地域に人を呼び込む“着地型ビジネス”といったものになります。さまざまなコンテンツがありますが、具体的には、“着地型ツアー”として工場や地産物を組み込み、過程を見せる工場見学をツアーにするなど、地域に来てもらう仕組みを商品として出しています。また、“るるぶ”の地域版を作っており、その地域の大学生と一緒にるるぶを作成して実際に販売もしています。他には、スタンプラリーの仕組みを作ったり、スポーツと絡めてイベントを企画したりしています。今回は、ツアーや観光の観点からの提案は出てこなかったのかなと思いますが、このようなことを実際にボランティアではなくビジネスでやっておりますので、“そういった関わり方もあるんだ”ということをごく頭の片隅に置いていただければと思います。

今回の提案の中で、発想としては“お墓を持つ”というのはすごく面白いなと思いました。また、ワークショップの途中を見させていただいた中で、たくさん意見が飛び交っていたので、コミュニケーションの場面も見させていただいた上で、5班の“ぐるぐるコネクト”が面白かったかなと感じました。

これから就活などで社会に出て大変なこともあります、みなさんの新しい発想を活かして、地域とこれからも関わり続けていってほしいなと思います。本日は私もたくさん勉強させていただきました。どうもありがとうございました。

岸上 龍平 教授（神戸親和女子大学文学部）

初めまして、岸上と申します。本日はフリーディスカッションから参加させていただきました。“つながり”という言葉がみなさんから出ましたが、それが一番大切だと思います。地域とたくさん関わっていて感じることは、みなさん世代の考えていることをどんどん発信していただくということと、地域の人と生で話をする、インタビューやヒアリングをどんどんしていくということです。そうすると、もっといろんな発見があると思いますので、是非みなさんが繋がり、このような活動をずっと継続されていけば素晴らしいなと思いました。今後ともよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。



清水 陽子 准教授（関西学院大学総合政策学部）

今日は朝からお疲れさまでした。他大学や他学部の活動を見ることができて、みなさんいろいろ収穫があったのではないかと思います。私もいろいろ見せていただき、とても勉強になりました。

最後のワークショップの中で一番気になったことは、これから関わり続けていく中で、“物理的な距離”というものをどうやって解決していくのだろうということです。情報の話になるのだろうか、でもそれだけでは少し足りないな、という思いがあった中で、そうではない答えを見つけたグループの発表は面白いなと思いました。しかし、こういう場



は現実可能かどうかは少し置いておいて、一層のこと“大学ごと移転してしまう”くらいの話が出てもいいと思いますし、もっとももっといろんな可能性があるのではないかと思います。時間も短かったのかもかもしれませんが、初めての仲間の中で少し難しかったかもしれませんが、もう少しいろんな可能性を考えられるのではないかと思います。

今日一日バスで移動しながら思ったことは、この“距離”というものが活動の継続に影響があるのではないかな、ということです。今後はそのあたりを解決できる良い手立てが見つければいいなと思いました。これからも、丹波地域にみなさん関わっていかれると思いますが、ぜひ一緒に頑張っていきたいと思います。本日は本当にお疲れさまでした。

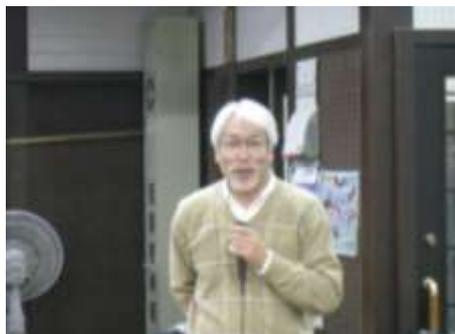
ありがとうございました。

山下 淳 教授（関西学院大学法学部）

みなさん今日は朝早くからお疲れさまでした。それぞれで発見があったらと思うので、それ以上特に言うことはありませんが、最後に少しだけお話をさせていただきます。

ワークショップの中で、みなさんにとって“関わり”というのは“情報”の話になってしまうのだなと実感しました。そのような中で、“お墓”と“仕事”という提案は、地域と関わらざるを得ない状況を作り出すという意味で、異色で個性があったと思いました。時代が変わって若い人たちの時代になりますが、どういうことが“関わり”ということなのか、情報のやりとりだけではないということを気にしていただきたいと思いました。

2つ目は、ワークショップを通して、大学や学部、専門分野や活動場所が違う、しかし同じ世代で同じような活動している人たちとコミュニケーションができたことを、良かったと思っていただきたいなと思います。そして、ひとつお願いがあります。明日起きたときに、“こういうところが頭に残った”“こういうところが少し引っかかった”といったものを忘れないうちにメモをとっていただきたい。それを後から読み返してみると、“あっ”という発見があるだろうと思います。本当に今日一日みなさんお疲れさまでした。ありがとうございました。



8. 神戸大学と地元レストランが共同開発した試作品について

神戸大学食資源教育研究センターでは、野生ナシおよび在来系統の収集、保存と育種母本の評価のため“イワテヤマナシ”を栽培しています。現在、この農場のヤマナシを篠山市の真南条上集落に植栽し、篠山の新しい特産品にできないかというプロジェクトを進めています。

この度、篠山市日置にある地元レストラン「ささらい」のオーナー藤岡敏夫氏が、このイワテヤマナシを使って考案された“イワテヤマナシのシャーベット”をご提供いただきました。

イワテヤマナシは、東北地方を中心に分布する野生梨で、1500本、30品種以上あると考えられています。小型で、香りや酸味が強いのが特徴で、宮沢賢治の「ヤマナシ」としても有名です。



イワテヤマナシのシャーベット



イワテヤマナシ

※フォーラム開催後の懇親会について

フォーラム開催後、学生同士の交流を深めるため、学生企画の懇親会を開催しました。情報共有やワークショップでの議論の続きが賑やかに交わされており、今後の活動に繋がる一日の素晴らしい締めくくりとなりました。

日 時：平成 25 年 12 月 8 日（日）18:00～

場 所：関西大学 TAFS 佐治スタジオ



懇親会開催後の集合写真

